アクセント論のために

――金田一春彦氏に答える――

柴田武

昨年の秋、短かい海外旅行がもうあと一週間で終るというころ、イスタンブルのホテルに送られて来た印刷物のうちに本誌第二十六号があった。そこに見つけたのは、金田一春彦氏の「柴田君の『日本語のアクセント体系』を読んで」だった。「ワカメの味噌汁」ならぬ、羊の臭がプンプンするコンソメをすすりながら一通り目を通したが、当時ほかの課題にとっくんでいたわたしには、ゆっくり読む気持のゆとりがなかった。いま（一月一日）ようやく落着いて読んでみると、いくつかの点で弁明する必要を感じた。

一　系統と体系

まず、春彦氏はアクセントの系統に強い関心を持っていられるのに、わたしはむしろ、アクセントの体系に興味を持っている。つまり、春彦氏はどちらかというと通時論に、わたしはどちらかというと共時論に、それぞれ傾いている。このことが、二人の説が対立しているかのように見せる原因の一つになっている。しかし、これは真の対立ではない。二つの、別々の立場で、両立しうるものである。問題になるとすれば、二つの立場の混同がそれぞれの説にありはしないかということである。

わたしは鹿児島県頴娃[エイ]町方言のアクセントについて次のようなことを述べた。この方言は、いわゆる第四類の語群と第五類の語群とが一つに統合されている点で東京方言と同じグループに属する（国語学第二十一号四七ページ。以下、これを XXI-47 のように表わす。）が、しかし、くだりアクセント核とのぼりアクセント核とを有する（そう解釈するのが妥当な限り）点ではむしろ京都市方言に近い（XX-158）。わたしは、このように、系統の点では東京方言に近く、体系の点では京都市方言に近いというように二つの面から述べた。ところが、春彦氏は、柴田は後者の似かよりを重く見るようだが、自分はむしろ系統の上の近さの方を重要と考える、と述べていられる（XXVI-27）。わたしは、体系の比

較に興味を持っていることはさきに述べた通りであるが、といって、体系の方を系統よりも重く見ようとは考えない。同じ重さで見るべきだと考えている。春彦氏も、蓮田方言のところでは、

それは、私が蓮田のア体系を、〈京阪アと似たア体系だ〉と言ったことについてである。私はたしかに似ているとは言った。がこれは、決して同じ系統だと言ったのではない。動物学では、イモリは両棲類に属し、ヤモリは爬虫類に属するがそれでも、動物図鑑などには「イモリはヤモリに似……」と書いてある。系統の全然ちがうものでも、外形の似たものを似ているということは、私は差支えないと思う。(XXVI—23)

のように、共時的な比較も考えていられる。このような比較は、「差支えない」どころか、大いに試みるべきものと、わたしは考える。ただ、わたしは、単に「外形の似たものを似ているという」—それは例えば、蓮田町方言では、「跡」などは○○、「足」「池」などは○|○のような高低の配置で、これは京都方言の「跡」などおよび「足」「池」などの高低の配置と一致するから、蓮田町方言と京都市方言とは似ている、といった—そういう個々の語(群)の比較ではなく、あらゆる語から得られる型そのものの体系で比較しようという点が違うだけである。

ここで、さらに、つっこんで言えば、アクセントの通時論的研究としては、アクセントの型の体系を歴史的に研究することも考えられる。つまり、わたしが現在の諸方言について組み立ててみたようなアクセントの型の体系が時代によってどのように変化するかを研究することである。過去の文献によるアクセント資料では、このような体系化はかなりむずかしそうであるが、一地域社会の老年と若年との違い——それは時代的変化と考えることができる——または現在以後の変化についてこのような観点から研究することは可能であり、意味のあることと考えている。

二　型の体系と語の体系

そういう型の体系を作るのには、型そのものをどういう言語単位から抽象するかということが問題になる。これは当然、最小のアクセント論的単位から始めるべきである。アクセント論的単位として最小のものは、東京語などでは文節と一致するが、鹿児島方言ではいわゆる文節とは必ずしも一致しない。したがって、「アクセント節」(または「アクセント単位」その他の術語でもいい)という別の単位を設けなければならなくなる。アクセント節がアクセントの最小単位であるから、アクセント節について型が決まる。いわゆるアクセント核がどのモーラにあるかがアクセント節について決まって来る。そうして得られる型の種類とモーラの数とを両軸として二次元の体系を作ろうと、わたしは試みた。

これに対して、春彦氏は、アクセントの型を語に求めていられる。例えば東京方言で、「花」と「鼻」は、

花　○○|(春彦氏○○」と同じ)

鼻　○○

のような型の区別があると解釈される。「花」と「鼻」は、それだけでは、高低の関係は全く同じで区別はない。

花　○|○

鼻　○○|

ピッチグラムもそれを証明している。もっとも、この二つの語を

二つ並べて、続けて発音させると、区別しようという意識が働くせいか、「花」の二つの音節のサイクルの差は、「鼻」のそれよりも幾分大きいことがある（XXI-56）。しかし、いかに違いがあっても、高低の二段で解釈する限り、どちらも「低高」の語であることは言うまでもない。

それなのに、どうして、「花」と「鼻」は、型の違う語とされるのか。それは、統辞・アクセント論的見地を入れなければわからないことである。つまり、「花」という語が「が」という語へ続いたときの高低の配置と、「鼻」という語が同じく「が」という語へ続いたときの高低の配置とが違うからである。

花が　○|○○
鼻が　○|○○

しかし、東京語では、次の附属語へ続くときに、いつも違う高低配置があらわれるというわけではない。例えば、「の」という語へ続くときには同じ高低配置になる。

花の　○|○○
鼻の　○|○○

だから、「花」の型が○|○であり、「鼻」の型が○○であると解釈される根拠は、「が」（「が」ばかりではないが）へ続くときの高低配置にある。なぜ、「の」へ続くときの高低配置は根拠にならないのか。

わたしはこう考える。「花」という語（文節ではない）は、かくかくのアクセントの型を有する、例えば、「花」は「ナ」にタキがある、というようなことは言えないのではないか。言えることは、「花」の統辞・アクセント論的機能と「鼻」のそれとが違うということではないか。つまり、アクセントの点で、「花」という語の附属語への続き方が「鼻」のそれとは違うということではないか。

アクセントの型が文節でなくて語について決まっているならばいわゆる附属語（これも語の一種）についても決まっているべきである。そうすると、附属語「が」は、ここにとりあげた限りで言えば、○のこともあり○|のこともありで、「が」の型はこの二つのどれだと決めるわけにはいかない。言えることは、「が」の自立語からの続き方と「の」のそれとがアクセントの点で違うということである。

いわゆる第一類ないし第五類の語群は、このような、統辞・アクセント論的見地から求められた語（2モーラ名詞）の分類と見ることができる。こういう分類がアクセント史の研究なり方言の分類なりに有用なことは、春彦氏はじめ多くの先輩が明らかにしたことで、わたしはこれを無視するわけではない。それどころかいかに有用かを示すために、わたしは、従来の研究をまとめて一つの表（XXI-46）を作ったのであった。この表だけは春彦氏のおほめにあずかった。わたしが言いたいことは、わたしの試みた型の体系は、これとは違う考えに基いていることである。春彦氏のは統辞・アクセント論的見地に立っていると述べたが、これに対して、わたしのは、純アクセント論的見地に立っていると言えるだろう。

また、第一類ないし第五類の語群の分類も「アクセント体系の分類」（XXVI-27）と考えていられるようだが、わたしは、これはアクセント体系の分類ではなく、一種の語（群）の体系だと思

う。アクセントの違いという分類基準によって得られた語の体系だと思うのである。語の体系といっても、名詞・動詞・形容詞などに分け、さらに、1モーラ名詞・2モーラ名詞と分けた、その下位分類としての語の体系である。ところが、わたしのアクセント体系は、これに対して、アクセントの型そのものの体系であって、語の体系ではない。ここでは、名詞・動詞・形容詞といった品詞の分類とは無関係である。

春彦氏は、わたしが「従来の研究では、名詞のアクセントの型だけをもととして、すべての文節のアクセントの型の種類を尽したことにしていることを難じて」(XXVI-35)いると言われる。わたしが、XXI-49で述べたのはそういうことではなかった。それはこういうことである。わたしの試みは、名詞とか動詞とか、そういう品詞の分類とは無関係に、アクセント節に見られる型そのものの体系を組み立てようとするところにある。そういう体系を作った上で、名詞という品詞(わたしの立場では、名詞を含むアクセント節をいうことになる。例えば、ハナ、ハナガ、ハナノはいずれもそれである)にはどの型とどの型とがあるか、つまり名詞を含むアクセント節の型がアクセント体系全体にどのように分布しているか、その分布の模様を明らかにする。例えば、東京語や京阪方言では、春彦氏の言われるように、名詞を含むアクセント節の型は、アクセント体系の全体に分布するが、形容詞を含むアクセント節の型はアクセント体系全体から言ったら、そのごく一部分を占めるにすぎない。

三　のぼりアクセント核

春彦氏の批判の一つは、わたしが提唱した「のぼりアクセント核」に向けられている。春彦氏は言われる。「のぼりアクセント核・くだりアクセント核の二つの術語を使い分けることは一種のゼイタクだと思う。」(XXVI-28)わたしもそう思う。できれば、くだりアクセント核だけで解釈したいのであるが、それがある方言では無理である。しかし、極端に言って、ただ一つの方言でも「のぼりアクセント核」で解釈しなければならないのならば、日本語(諸方言)のアクセントの解釈には二つの述語(概念)を用意しなければならないわけである。春彦氏も、二つの術語を使い分けるのはゼイタクだと言われるだけで、すべての日本語諸方言がくだりアクセント核(春彦さんのタキにほぼ等しい)で解釈できるとは考えていられない(XXVI-28)。

わたしがのぼり核・くだり核で解釈した方言も、春彦氏は、タキの考えで解釈できると言われるのはいいとして、のぼり核・くだり核の方が解釈しよいものとして、蓮田・小国・大鳥の三つの方言を認められた(XXVI-35)。このことは重要である。なぜならば、こうなれば、のぼりアクセント核の有意義性については、春彦氏との間に議論の余地がなくなるからである。

ただ、春彦氏は、「のぼりアクセント核が有意義なものは、大体アクセント体系が変化しつつある過渡期の方言だけだ」(XXVI-35)と述べていられる。わたしには、蓮田・小国・大鳥の方言が過渡期にあって、他の方言は過渡期にない、ということが理解できない。わたしの考えでは、すべての言語が常に過渡期にある。なぜなら、すべての言語は常に変化しつつあるからである。

しかし、春彦氏の言われる「過渡期の方言」というのは、こう

いう意味ではないと察せられる。それはおそらく、アクセントの高低の差が現象として極めて微妙で観察しにくいとか、同じ語（群）の音節間の高低関係が動揺している（高低の配置が一定していない）とかいった方言をさすのであろう。

なるほど、蓮田方言はそういう意味で「過渡期」の方言と言えるかもしれない。しかし、小国・大鳥両方言は、決して、春彦氏の言われるような(XXVI-33)、「かなり型の区別の曖昧なア体系」ではない。蓮田方言に比べたら、両方言とも、高低の差もはっきりしていて、動揺のないアクセントである。

しかし、もし、小国・大鳥・両方言のアクセントを、上の意味で「過渡期」にある方言と見る人があっても、それは音声学のレベルでのことで、音韻論のレベルでは、どんな方言であろうと、一定の体系に分析されるはずのものである。いわゆる過渡期の方言は、体系化がむずかしいということはあっても、体系としては安定したものが得られるはずである。体系とは、もともと、そういうものだからである。言語は常に安定した体系を持ちつつ、絶えず変化にさらされている、というのがわたしの考えである。

四　統合機能

わたしが「のぼりアクセント核」を設けなければならなくなったのは、あらゆる方言について、アクセント節に一つの、しかも一つだけの核を認めようとしたからで、これは春彦氏の御指摘通りである。(XXVI-25)。

ところが、「アクセント節に一つの、しかも、一つだけの」という言い方は適切ではない、なぜならば、それは、「一つ」ということを「一つのモーラに認められる」ととられかねないからである。それは一つのモーラと限る理由はない。統合機能というのは、音節をアクセント節にまとめる働きである。聴覚心理的には注意の集中点を作る働きであるとわたしは考えているから、連続するモーラならば、二つ以上のモーラに注意の集中点（集中域）が作られても差支えないわけである。春彦氏が、わたしの「一つの、しかも、一つだけの」という原理では解釈できない例として出された高知方言も、「一つ」を「一箇所」と考え、連続する二つ以上のモーラに注意の集中域を作ることもあるとすれば、十分解釈ができる。

このように考えてくると、「核」という術語が不適切な感じがする。むしろ、和田実氏の「契機」という術語を借用して、「アクセント契機」「くだりアクセント契機」「のぼりアクセント契機」のように言った方が適切だと思われる。したがって、以下はこの術語を使って述べよう。

さて、高知方言の「四音節名詞」の「味噌汁」「中指」の高低関係は一見わたしの「一つの、一つだけの」という主義では解けないかのようである。すなわち、「味噌汁」は、○●●○であるから、これをもし○「○○○と解釈すると、「中指」の○●○○「絹糸」の○●●●と区別できなくなるし、また、もし○○○○と解釈すると、「草花」の●●●○と区別できない。「中指」にしても、○「○○○と解釈すると、「味噌汁」「絹糸」と区別できないし、また、もし○○「○○と解釈すると、「石垣」の●●○○と区別できない。

わたしはこれを次のように解釈する。「味噌汁」の○●●○は

第二モーラに「のぼり契機」があり、第三モーラに「くだり契機」のある型と解釈する。つまり、第二モーラから第三モーラまでのところに注意の集中域があるものと考えるのである。この二箇の連続するモーラのところに統合機能が働いていると解釈するわけである。このように解釈すると、「中指」の○●○○は第二モーラに「のぼり契機」と「くだり契機」とがある型と解釈されることになる。

したがって、「四音節名詞」の七つの型は次のように解釈される。春彦氏のと並べてあげてみよう。

語例	高低関係	春彦氏の解釈	柴田の解釈
友達	●●●●	○○○○	○○○○（○○○○）
草花	●●●○	○○○」○	○○○」○（○○○○）
石垣	●●○○	○○」○○	○○」○○（○○○○）
鶯	●○○○	○」○○○	○」○○○（○○○○）
絹糸	○●●●	」○○○○	○「○○○（○○○○）
味噌汁	○●●○	」○○○」○	○「○○」○（○○○○）
中指	○●○○	」○○」○○	○「○」○○（○○○○）

春彦氏の解釈と比べて、どちらにしても符号を二箇所につけるのだから、結局、「一箇所主義」ではない点で同じ解釈ではないかと言う人が出て来るかもしれない。それは皮相な見方である。

春彦氏は、「味噌汁」「中指」を、「タキ」を二箇所認めることによって解釈される。わたしも、「契機」は二箇所に認めることになるが、統合機能の働く注意の集中域は一箇所である。連続する幾モーラかである。もし、名称をつければ、「草花」「石垣」「鶯」は「くだりアクセント契機」の型、「絹糸」は「のぼりアクセント契機」の型、「味噌汁」「中指」は「のぼり・くだりアクセント契機」の型、ということになろう。「くだり契機」型というのは、高から低へ移るところまでは高で続いている型ということであるし、「のぼり契機」のそれは、低から高へ移るところまでは低で続いている型ということである。これに対して、「のぼり・くだり契機」型は、どこかで低から高へ移り、どこかで高から低へ移る型である。「どこか」が同じモーラであることもあれば、次のモーラ、次の次のモーラということもある。この名称はそういうことを表わしていることになる。

さて、わたしの考えている統合機能はこのようなものであるが春彦氏は、さらに、統合機能は「文節の切れ目を示す働き」でもあると考えていられるようである（XXVI-26）。

東京で「この竹が枯れた」を、コノタケガカレタという。この場合に、コ・タ・カの低が、それ〳〵文節のはじまりを示しているのは、都城でコノタケガカレタという場合のノ・ガ・タが文節の終を示しているのと同じ役割をつとめている。すなわち、アクセントの統合機能を重要視する時は、東京方言のカゼ・カゼガのカの低を無意味だと言えなくなってくる。

わたしの言う統合機能は文節（わたしの「アクセント節」）の切れ目を示す働きとは全然別のものである。なぜならば、統合機能は音節をアクセント節にまとめる働きであって、それ以上の何物でもないからである。

文節の切れ目はむしろ音声学的レベルの働きによって示される

ことがあると考えるべきではないか。春彦氏も指摘されているように（XXVI-26）、東京方言の、高から低へ移るところ（それはしばしば文節の頭に当る）によく文節の切れ目がある。

コ|タケガカレタ

ところが、いつもそうだとはもちろん言えない。

コ|タケガ|オレタ

アクセント、つまり、高低の配置がアクセント節で一定していない、いわゆる「自由アクセント」では、一般に、アクセントは言語単位の切れ目を分かつのには役立たない。アクセントが役立つのは、都城方言のような高低の配置がアクセント節で一定しているような、いわゆる「拘束アクセント」においてである。

春彦氏は都城方言について次のようなことを述べていられる。

都城方言は、すべての二モーラの文節は○●型であり、すべての三モーラの文節は○○●型である。もし、音韻的対立という点から見ると、この方言には、音の高低に関する対立はなく、したがってこの最後の高は音韻論的に無意味である。（XXVI-26）

わたしも、都城方言の「最後の高」が「音韻論的に無意味」という結論には賛成する。だから、もし、わたしが都城方言について記述するときには、語形にアクセント記号を一切つけないであろう。それで十分記述しうるからである。しかし、音韻論的に無意味だということが、ただちにアクセント契機が認められないということにはならないと考える。「最後の高」に「音節を統合して一つの文節にまとめるはたらきを認め」（XXVI-26）るべきであると考えるのである。

たしかに、熊本市方言のような、いわゆる「一型アクセント」と言われる方言は、音韻論的に無意味で、かつ、アクセント契機も認められない。だから、熊本市方言は、アクセントのない方言すなわち、「無アクセント」と言うべきもので、都城方言こそ、「一型アクセント」の名に値する方言だと思うのである。

五　アクセント意識と頴娃方言

ここで、春彦氏のアクセント観察とわたしのそれとが態度の点で対照的であることに触れておこう。それは、春彦氏がアクセント意識を非常に重く見られるのに対し、わたしは軽く見ようとする点である。わたしは、意識の報告よりも、自分の耳による観察と器械による記録とにいっそうの信頼を置く。メンタリスティックとマテリアリスティックという対立用語を使って対立させる人もあろうかと思う。しかし、このように割り切って、どちらかのレッテルをはりつけるのは、議論の技術としては巧みなのかもしれないが、わたしはこれを好まない。

わたしがとりあげたいのは、例えば、鹿児島県頴娃方言について型を決めるのに春彦氏が次のように述べていられる点である。

エイ町の人にハナという音連結をまっ平らに発音して聞かせると、あっさり、それは「花」の方に聞えると言う。「花」でも「鼻」でもない妙な発音だ、などとは言わない。私はこのことから、「花」における高まりは、「鼻」における低まりのようには重要ではないと思うのである。（XXVI-31）

これは、平山輝男氏がB型と名づけられたものの解釈についてわたしが最終モーラにのぼり契機を認めたのに対し、春彦氏は、

ここにくだり契機（春彦氏のタキ）を認めるという根拠の一つとして述べられた箇所である。

ところで、わたしは、春彦氏の試みられたような実験は危険ではないかと思う。わたしはこういう実験に失敗した、にがい経験があるので、たとえ、こういう実験を試みるとしても、それは型の観察が終ったあとで、傍証を得るために用いることにしている。ましてや、この実験の結果を型の解釈の第一次的な根拠とすることは、わたしとしてはできない。

わたしも、頴娃方言については、機械的に考えて四つの解釈のしかたがありうる。どれにも、音声的事実からは、そう解釈することが妥当でないとするほど積極的な根拠は見当らない、と述べた。そこで、第二次的に、現地の知識人の内省の報告、すなわちアクセント意識をとりあげて、これを型の解釈の根拠とした。これは、アクセント意識といっても、現地の人でない調査者が刺激を与えて、それに対して現地の人がどのように反応するかを調べるというのとは違って、現地の人自身の自分の言語についての内省である。

ところで、一般に、二つのアクセント節を比べて、二つは、アクセント（あがりさがり）が同じか違うかということを尋ねるところまでは、まず危険がないと思うが、自分の方言にない高低配置のアクセント節を聞かせて、自分の方言にある型のどれに該当するかを当てさせることは、むずかしい。つまり、当てになる答を得にくいのではないかと思う。もっとも、こういう実験も、その地域社会をよく代表する相当数のサンプルについて行うならば意味があると思うが、その結果は、「なんとも言えない」ということになりかねない。

わたしは頴娃町ではこのような実験を試みなかったが、この地方では、春彦氏が発音して与えられた「まっ平ら」な高低配置はもちろん、東京語の「平板式」、つまり、低高の高低配置も、ひどく聞きなれい発音のようである。それは、頴娃町のすぐ近く、揖宿郡開聞村の川尻中学に上原森芳という、アクセント教育の鬼みたいな先生がいられるが、その先生の話である。この先生は、標準語教育はアクセント教育から始めるべきだという信念で、恐しいほどの情熱に燃えて、ここの生徒に標準語、つまり東京語のアクセントを教えていられる。この先生に会ったとき、アクセントを教える苦労を語られて、「鹿児島のアクセントはことばの一番終りの音節を高くするか、終りから二つめの音節を高くするかそのいずれかで、平板というのがない。東京式の平板を教えることに一番努力を払いました。」と。わたしは授業を参観して、この先生のことばを確認した。東京語の高低、高低低や、低高低、低高高低などは比較的まちがいなく使っていたが、東京語の平板式の語は、多く、高低（低……）型や鹿児島方言式の低（低……）高型でまねられていて、一般にギクシャクした感じを受けた。

こういう事情を考えると、むしろ、この地方の、「花」（平山氏のB型に属する）を○「○のように、第二モーラにのぼり契機を認めること（それは現地の人の内省の報告に従うことである。）の方が、妥当らしく思われるのである。

春彦氏は、「花」を「ナ」にタキがある、すなわち○○」と解釈する根拠の第二として、次のようなことを述べられた。（XXVI-31）

もし、「花」を柴田君のように○「○型とすると、「花ぢゃ」は、○「○○型と表記することになる。「女子」の○○」○型（柴田の表記で○○」○型）とはちがう型に表記されてしまう。しかし、「花ぢゃ」と「女子」とは明らかに同一のアクセントである。もし、「花」を私のように○○」（柴田の表記で○○」）と表記しておけば、「花ぢゃ」はハナ」（柴田：ハナ」）にヂャがついた形、すなわちハナ」ジャ（柴田：ハナ」ヂャ）となって具合がよい。

これは、わたしがXXI-59～60で説明したことをよく読んでいただけなかったためではないかと思う。まず、この方言では、アクセント節が必ずしも、いわゆる文節と一致しないことを注意しておかなければならない（XXI-58）。すなわち、

〔-o-do-go-ŋa〕 /odogo「ga/ 男が
〔-o-do-go-o〕 /odogo「o/ 男を
〔-o-na-go-ga〕 /onago「ga/ 女が
〔-o-na-go-o〕 /onago「o/ 女を

では、それぞれが全体として一つのアクセント節である。なぜならば、最後の音節が高いか、最後から二番目の音節が高いかであるからである。ところが、「男だよ」ということは、

〔-o-do-go-dʒa〕

のように言って、決して、

〔-o-do-go-dʒa〕

とは言わない。また、「女だよ」ということは決して、

〔-o-na-go-dʒa〕

のようには言わないで、

〔-o-na-go-dʒa〕

のように言う。これは、この方言の、すべてのアクセント節は○○|か○○のいずれかに属するという性質に反する高低関係である。もし、これをそれぞれ別の型と認めれば、この方言にはアクセントの型が少なくとも四つあることになる。また、これを例外と見なすならば、あとで例をあげて説明するように、例外が規則的である。だから、これを二つのアクセント節と見て、

/ona「go ˥dʒa/

と解釈するならば、例外はなくなるのである。これと並行して、〔-o-do-go-dʒa〕も /odo「go ˥dʒa/ のように二つのアクセント節と解釈される。

同じような解釈は、

〔ke-dʒoi〕 /「ke ˥dʒoi/ 書いてある
〔ki-dʒoi〕 /「ki ˥dʒoi/ 聞いてある

にも施されることは、XXVI-60 に述べた。

したがって、春彦氏のあげられた「花ぢゃ」は、/○「○/（花）と/「○/（ぢゃ）との二つのアクセント節と認められる。なお、「女子（おなご）」は /○○」○/ と解釈される。なるほど、音声的現象としては、春彦氏の言われるように、両者とも〔-○-○-○〕（低高低）で区別がないが、（統辞・）音韻論的には全く別個のものと解釈されるわけである。

頴娃方言に触れたついでに、この方言のくだりアクセント核を、高から低へ移った低に認めたのは、東京方言などで、くだりアクセント核を高から低へ移る高に認めたのと矛盾するではないか、そういう指摘を川上蓁氏から受けた（アクセント表記の零

と無限大「国語国文」二五九号、三一ページ)。これは抗弁の余地がない。わたしの立場では、頴娃方言でも、高から低へ移る高にくだりアクセント核を認めることになるから、このように、XXI-59 の第七表のミスを訂正しなければならない。

このほか、細かい点では議論すべきことがまだ残っている。わたしの扱い方で考慮を要する点もある。しかし、いまは、おおまかな点について、春彦氏の御批判に答えながら、わたしの考えをふたたび、やや詳しく述べるにとどめた。(一九五七・一・一)

(三・一七補)

〔補い〕四の統合機能のところで述べた考え——注意の集中域は二つ以上のモーラにあってもいい、連続した一箇所の集中域であれば統合機能は満足する、という考えに基いて、高知方言を含めた全国諸方言を見直してみると、次のような考えに行きつきそうである。

高知方言のある型をのぼり・くだり両契機で解釈した以上、東京語についても ○1 ○○○(さくら), ○1 ○○(朝顔), ○1○1 ○(ふろしき), ○1○○(弟, 太だち) のように解釈しなければならなくなるのではないか。日本語のすべての方言を一貫した原理で解釈することを前提とする限り、そうなるわけである。

ところで、こう解釈すると、従来の「音声学的」高低関係を示す ○○○○, ○○○○, ○○○○, ○○○○ という表記に見たところ近くなる。しかし、この方はただ、高と高でないところとを区別して表記しただけのもので、契機(核)という音韻論的な考え方がはいっていない。

日本のすべての方言は、①アクセント契機なし、②のぼりアクセント契機だけ、③くだりアクセント契機だけ、④両契機あるの四つの特徴と、さらに契機がどのモーラにあるかによってすべての型が解釈できる、とすべきではないか。東京語は、このような考えで解釈すると、n(n≧3)モーラのアクセント節には、

アクセント契機なし(・・)	なし	
のぼり契機だけ	(A・)	2・(第2モーラにのぼり契機のある節が1つだけあるという意味)
くだり契機だけ	(・A)	・1(第1モーラにくだり契機のある節が1つだけあるという意味)
両契機ある	(AA)	22, 23, ……2(n-1)

のような分布が見られる、ということになる。

ここで断っておくべきことは、東京語のアクセントを東京語だけをとりあげて表記する場合には、」の記号ひとつですべての型を表記しわけることができ、またそれが便利だということである。日本語の諸方言のアクセント契機を一貫した原理で表記しようとするときは、」と┐二つの記号を用意しなければならないし、それで十分だということである。都城方言でも、都城方言だけのアクセント表記ならば、何も記号をつけないで間に合うが、アクセント契機がどこにあるかと言えば、いつも最後のモーラにあるとしなければならない。そして、表記としては最後のモーラに┐をつけることになる。これと比較して考えるべきことだと思う。(五・三一)

—国立国語研究所員—